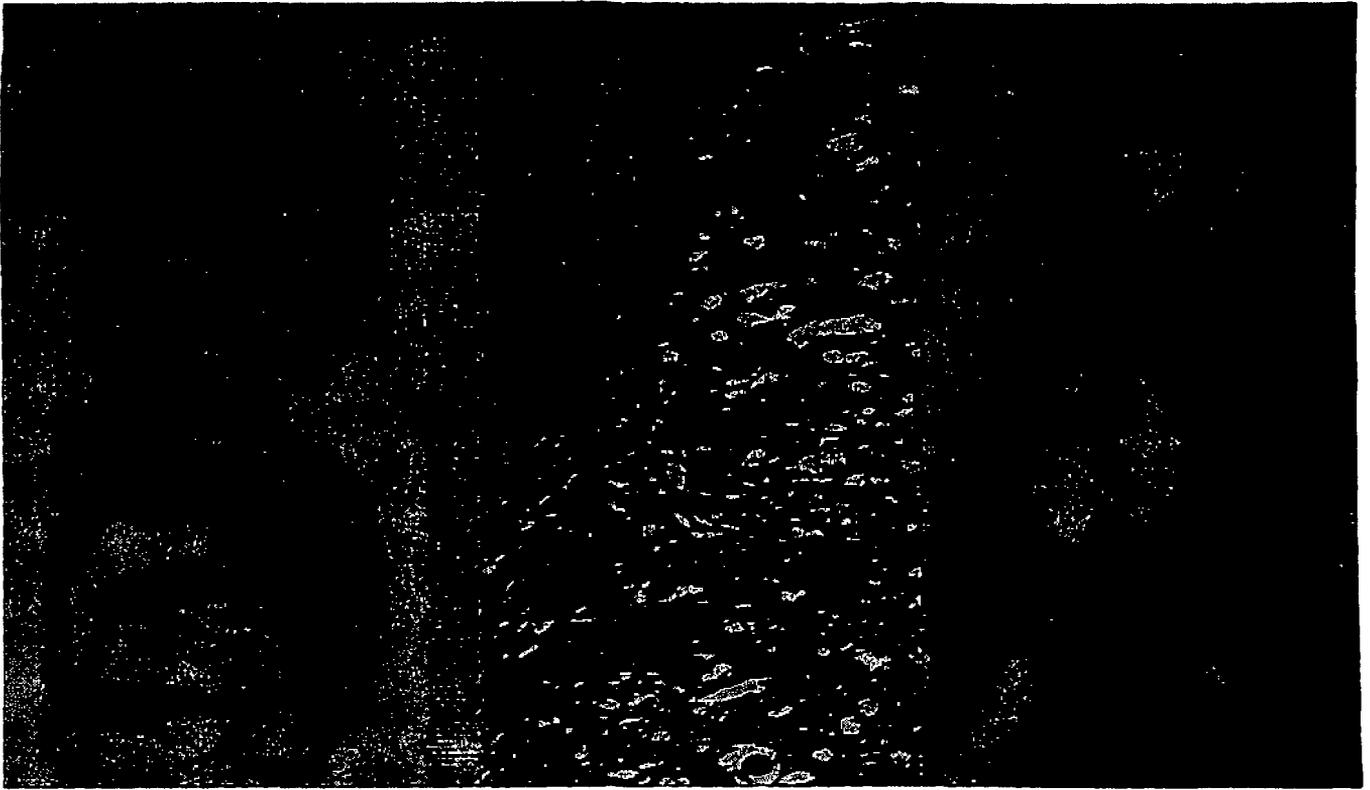


大量の結合組織に包埋された猫の腎臓

東京農工大学農学部家畜病理学教室 出題

第11回獣医病理学研修会 標本No.161



1

2

3

東京都練馬区開業町田獣医師扱い。削瘦して食慾元気がない3才、牡の本猫を触診し、左腎部に腫瘤状結節を認めて摘出手術を行った。手術中に斃死したので剖検したところ、他臓器には著変がなく、左腎臓にのみ強い病変があったので、それをホルマリン液に固定して持参したとのことであった。

それは、横径が約10.5cmと縦径約8.5cmの楕円球状の、灰白色、光沢を有する線維結合組織の塊りである。重さは130gもあり、正常な猫の片側腎20g前後と比べて、その病変のひどさが思われた。剖面を檢すると、それは写真1の如く、長軸に沿った2ヶの深く広い裂隙があり、そのなかには多量の陳旧な凝固血液がはいっていた。

組織学的には、大量の結合組織が、崩壊しつつある腎臓と血液凝塊を完全に包埋しており、それは薄い所で2mm、厚い所では13mmにも達している。腎臓には、腎門部附近実質の欠損と裂隙形成、梗塞性病変の散発、各種の程度の血管病変などがあり、更に写真2（鍍銀染色・弱拡大）の如く、彌蔓性的間質結合組織の増加と腎単位の荒廃減数や、写真3（PAS反応・強拡大）のように、残存する糸球体輸入動脈壁のPAS陽性顆粒の増加などが認められた。本猫の材料はこの腎臓のみであるので、正確な原因や経過を考察することはむづかしいが、あえて、“大量の癥痕性肉芽組織に包埋された陳旧な外傷性の腎臓病変”と診断してみた。